

Jean Gersonの民衆説教における
「ルカによる福音書」の役割

富 永 敦 子

富永 敦子

要旨

15世紀のパリで活躍した神学者ジャン・ジェルソン (Jean Gerson) の思想と神学について理解を深めることから着手し、彼の説教を分析することで、彼が主として「ルカによる福音書」を用いて説教をした理由とその目的を解明した。民衆を救いへと導く上で、彼はどのような聖書の御言葉を通して彼らに回心を促したのか。この点について、彼の説教で引用されているルカ福音書に焦点を当て、その特徴と役割を考察した。

ジェルソンは、万人に対して、「救い」・「真実な信仰の光」を示すことに熱意を注いだ。その真の道は、キリストによって、弱くて小さき者・罪深い者にも開かれているという点をジェルソンは強調し、聴衆に悔い改めを願った。確かに「万人に対する救い」という面では、托鉢修道士を始めジェルソン以外の他の説教師にも見られるテーマだろう。しかし、「子供への関心」の大きさという面は、ジェルソン独自の特質と言えるのではないだろうか。もちろん、彼は病人や貧しい者など社会的に小さき者にも関心を寄せ、福音を通して神の愛を注いだ。しかし、彼はこのような小さき者の中でも、子供という存在に特に目を留めていたのである。というのは、彼が最も頭を悩ませていた「七大罪」の罪に耽るか否かは、子供という若き頃に、正しい習慣と道徳を身につけるか否かに大きく影響している、と彼は考えていたからである。ジェルソンは、幼き頃に御言葉を通して真理の道へ導かれることを民衆に願い、語り続けたのである。

一方ルカも、神の計画を、社会的に小さき者、特に子供に関わる出来事の中に見出しているという特徴を持つ。このように、子供への関心という面で、ジェルソンの思想とルカ福音書の特徴は一致していることから、彼の説教におけるルカ福音書の御言葉は、民衆を真の光へと導く上で、大きな説得力を持ったと言える。

第1章 中世後期における説教の発展

初めに、近年における説教の研究史の動向について、見ていく。まず、ダウレイ（D.L. d'Avray）が1985年に出した著書¹の中で示している研究について紹介する。彼は、フランシスコ会やドミニコ会の説教写本は、マス・コミュニケーションとしての考古学的な遺産であると考え、説教の性質や内容に関するこのような新たな研究は、社会的、修道院的、学術的な文脈において研究されるべきものであると述べている²。

アロン・ヤコヴレヴィッチ・グレーヴィチ（Aron Yakovlevich Gurevich）は、著書の中で、「例話が、説教の中で最もわかりやすく効果が上がるものとして珍重された」という考えのもとで議論を展開している³。説教は、教会人と信徒を結ぶ知的コミュニケーションの主要な手段であり、信徒の日常生活の中に入り込むために様々な努力と工夫がなされる。例話は、社会関係、社会体制全体の問題、貧富の問題、家庭と教育、異端信仰者の評価など、幅広い諸問題が扱われたので、「中世の社会生活を研究する上で一級の資料である」とグレーヴィチは評価している⁴。

なお、我が国においては、大黒氏と赤江氏による説教研究が盛んである⁵。

また、ダニエル・ホビンズ（Daniel Hobbins）は、書写文化（written culture）が急速に広まった時代における出版活動を主眼としている。ホビンズはジェルソンを、書写文化の広がりには貢献した人物として評価している。ジェルソンは、ラテン語とフランス語の両言語で著作を出すことで、より多様な階層の人々に自身の思想を伝播したのだ。ホビンズは、ジェルソンのこのような幅広い伝達活動に焦点を当て、説教や著作などで述べられている思想と社会との関係に注目している。ジェルソンの著作は、学際的な広い文脈で語られることで、15世紀ヨーロッパの風景を魅了しながら国境を越えて広がったのである⁶。

富永 敦子

このように、近年の説教研究は、時代ごとに関心の角度を変えながら進展を重ねてきた。

12、13世紀は、説教の隆盛期と言われている。12世紀末までに、民衆説教の重要性が増すことによって、説教は決定的な段階へと突入した。そしてこの民衆説教の重要性が、13世紀初めに教会による多様な手段の中で顕著となった。

11世紀と12世紀の霊的興奮に応答した13世紀の説教は、大部分が14世紀半ばまでにその変化を遂げる。14、15世紀という中世の最後のこの2世紀間には、説教というシステムの洗練と精巧が見られた。あらゆる場所で、より多くの説教師や説教の助けとなる様々な種の書物が現れ、説教を学ぶための多くの機会がさらに与えられた。フランスは、あらゆる特性を備えた優れた説教師に恵まれ続けた。例えば、クレメンス6世(Clement VI)のような教皇、そしてジェルソンのような神学者、托鉢修道士のヴァンサン・フェリエ(Vincent Ferrer)である⁷。またフランスではないが、この時代において特に知られていた説教師は、シエナのベルナディーノ(Bernardino da Siena)である。

13-14世紀にかけて民衆説教の発展が完成に近づいていったが⁸、最終的に固まった説教の手順は次のようなものであった。説教師は、説教壇につき、古くからの慣習に従って胸の前で十字を切る。そして聴衆に向けて彼らの母語で話し始める前に、その日の説教の主題をラテン語で読む。説教師は主題を述べると、この説教が良い実を結ぶように聴衆を祈りへと招く。この説教師のための祈りと、自身が説教師にふさわしくないという何らかの断りを挿入したこのような前置きは、副主題(protheme/antetheme)と呼ばれる。説教師と聴衆によって捧げられるこのような祈りは、「私たちの父なる神(Pater Noster)」、もしくは「アヴェマリア(Ave Maria)」という導入の祈り文句によって始められる。例話や比喻によって主題が展開された後、説教師は新たな祈りをもってその説教を終える。このような手順は、13世紀に入って頻繁に見られるようになり、これを

14世紀にさらに発展させ普及させた⁹。主題は、聖書の中の短い節から引用されたが、これをさらに2つから4つに分割し、それぞれ順に解説していく。このような分割の形式をとる説教は、「新説教 (*sermo modernus*)」と呼ばれ、後に、教義的、神秘的、道徳的教を明確に示すものとして良き役目を果たした。聖書の本文を分割しながら丁寧に解き明かすこのような主題説教は、民衆説教にふさわしいと多くの神学者が評価している¹⁰。

14-15世紀は、新たな説教の台頭と成長があった。それは、教会の構成員の中に、キリスト教真理の理解についての内的な関心が生じたという点と、道徳的関心が呼び覚まされたという2つの点において、キリスト教精神が新しく強力に回復されたということ、行為という外面性から、感情や意志という内面性へと引き戻されたことである。弱く罪深い者の間でも、悔い改めの思いと、より良いものを求める気持ちが起こり始めるなど、広い範囲で良心の覚醒が起こってきたのである。従って、社会的宗教的生活の中の悪や悪癖を嘆く叫びが切実な声で広がり、これがこのような時代の説教の最も一般的で、顕著な特徴であった¹¹。ジェルソンの説教においても、このような時代的な特徴がよく表れており、罪、特に七つの大罪に対する警告と悔い改めへの導きに関する説教が非常にたくさん残っている。世界が純粋な福音の説教を必要とする時があるとすれば、この時こそであった¹²。

教会の刷新、キリスト教信仰の神髄である福音による新しい生命の呼びかけは、この時期には民衆から起きた。中世後期の一般信徒は、いろいろな方法で自分たちの存在と信仰上の要求を明らかに知らしめたのである。特に、14-15世紀には、注意を促し、指導や霊的確約を求める一般信徒の声がこれまでになく聞かれるようになった。あらゆる民衆の信仰の中心には、霊的体験を直接味わいたいという希求がある。どんな場合でも実際に経験することが、教会の儀式の形式よりも重要だった。

また、民衆に霊的な独立も見られた。聖書を自ら読むほか、自分で得

富永 敦子

た福音の知識に基づいて、周囲の民衆に御言葉を伝える積極的な役割が生じた。このように、中世後期の民衆運動はすでに聖書を規範とする信仰生活の追求に着手していた¹³。

第2章 ジェルソンの説教活動

ジェルソンは、フランス北東部のルテル（Rethel）の一角ジェルソン（Gerson）で、1363年12月14日、12人兄弟の長子として生まれた。彼の生きた時代は、14世紀初頭からのアヴィニョン（Avignon）教皇の出現以来、教会大分裂や百年戦争などで、混乱と窮乏の只中であった。彼の関心は特に、この大分裂を鎮静させ教会の平和と統一を回復することであった¹⁴。

ジェルソンは、14歳で大学教育を受けるためにパリに出て、ナヴァール学寮（Collège de Navarre）¹⁵の学生として登録された。彼の恩師ピエール・ダイイ（Pierre d'Ailly）¹⁶が、1395年にル・ピュイ（Le Puy）の司教に任ぜられたためパリ大学学長（cancellarius）の職を辞任すると、師の後を追って学長の職に任ぜられることになった。

ジェルソンは、学長としての職務を遂行しながら、パリ市内の幼い子供達を集めて教育を行った。人々は、それは学長の身分にふさわしくないと行って非難した。しかしジェルソンは、「この町の幼い子供たちは、世の害悪に取り囲まれているばかりか、それによって苦しめられ、浮浪者がパンに飢えているように良き教育に飢えていることを一体君たちは見ないのか」と言い返し、大学学長の身分や権威が、幼い子供を教育する仕事と釣り合わないことはない、と自身の教育改革の理想を人々に強く印象づけた¹⁷。

彼の説教の多くは七大罪についてであり、その中で彼は、両親は子供が墮落しないようにするべきであり、彼らの考えにおいても罪に耽るこ

とのないようにするべきであると説いている¹⁸。子供の教育への関心は、ジェルソンの教育改革における際立った特徴だと言える。彼は、罪を指摘し悔い改めへと導くという内容で民衆に説教することを使命とし、特に1402年から1403年にかけて集中的に説教を行った。

ジェルソンは晩年、死に至るまでの10年間をリヨン(Lyon)のセルスタン(Célestin)修道院の一室で過ごした¹⁹。リヨンにおけるこの10年間は、彼にとって生涯の中の最も静穏な日々であり、内省と祈りの生活に専心できた²⁰。1425年、ジェルソンはセルスタン修道院からサン・ポール(Saint-Paul)参事会教会に居を移し、この教会の聖歌隊の指導と教育の責任を担った²¹。彼はリヨンにおいてもパリにおいてと同じく、幼い子供たちを教育していた。

ジェルソンは神秘主義者として広く知られ、多くの著作を残しているが、彼の神秘思想を事細かに表している最も重要な書物は、1402-1403年にかけて著された「神秘神学(*De mystica theologia*)」である²²。

「神秘神学」の始めに、ジェルソンは「神の認識は探求する知性によるよりも、むしろ悔い改める情動によって得られるかどうか」を明らかにすることから着手すると言う。これが本書の主題であり、神の認識は思弁神学によるよりも神秘神学によって得られるとする。神秘神学において重要なのは、知識ではなく信仰である。従って、信仰篤いものなら誰であれ、たとえか弱い女もしくは無学者であるとしても、手に入れることができる。ジェルソンは、信仰にのみ生きようと熱心に努力する当時の人々の心を十分に理解しつつ、それをどのように正しく導くことができるかに腐心して、この書物を著したと推測される²³。この書の冒頭に記されている「悔い改めて福音を信ぜよ(*Poenitemini et credite evangelio*)」という句は、当時の教会、大学および世俗一般において信仰を忘却した人々の高慢さに対して吐かれたものである²⁴。悔い改めの熱意によって、また悲嘆によって、さらには心の呻きに基づいて叫び声をあげるものとしての祈りによって、神に近づき神を知ることが

富永 敦子

出来ると考えたのである²⁵。この著作が書かれた1402-1403年と時期を同じくして彼は多くの説教を行っており、それらの説教のテーマも「悔い改めて福音を信ぜよ」を土台にしていることから、彼の教化の根本にある思想は、「悔い改めること」、「福音に立ち返ること」であることが明確である。彼の教化の理念は、哲学の限界をわきまえない傲慢な知識、この傲慢の原因となる空しい好奇心、これらの一切を斬り捨てて、自己の限界をわきまえた謙虚の精神に立ち戻ること、またパウロが教えたキリスト教の慈愛の精神に決して反することのない知識を追求することであった²⁶。

また、ジェルソンの特徴として、ヨセフ (Joseph) を強く崇敬していたことが注目に値する。ヨセフを重視することの歴史は、聖家族重視の歴史にはほぼ重なる。聖母子像は、父不在の聖家族の図像のことを指し、そこでは聖家族は母子家族である。これは、キリストが処女懐胎によって出現したという教義の当然の帰結である。しかし、聖家族を現実の家族のモデルに据えるためには、どうしても現世の父が必要であり、当時の現実の家族は現実的なモデルを求めていた。ヨセフをマリアの夫と認知することへのためらいがある中で、聖母子像の歴史にどのようにしてマリアの夫としてヨセフを付け加えていくか。その変容の過程が聖家族図像の歴史であった²⁷。ヨセフが前面に出てくるのは、14世紀以後のことであり、聖家族崇敬の高まりとともにようやくヨセフの役割が認められることになった²⁸。

ヨセフに神学上の位置付けを行ったのはジェルソンであるとみなされている。彼は、ヨセフのイメージを無力な老人から元気な若者へと転換し、ヨセフを「地上の三位一体」の家長に位置付けた。彼は「おお、崇敬すべき三位一体、イエス・ヨセフ・マリア、それは神が結びつけたものであり、愛の調和そのものである」と記すなど、ヨセフの存在価値を強調している。ここでは、マリアよりヨセフの名が先に挙げられている。ジェルソンは常にこの順序を守ったということから、彼がマリアよりむしろ

ヨセフの存在に心を留め崇敬していたことが分かる²⁹。

11世紀から多くの神学者が、バプテスマの聖ヨハネを最も偉大な聖人として度々例話に引用するなど、崇敬の対象としていた風潮の中で、ジェルソンはヨセフに、聖ヨハネと匹敵する位置を与えた。彼は、ヨセフが最もキリストと親しく近い存在という点で、聖ヨハネよりも優れていると考えていた³⁰。また、ヨセフとマリアの結婚を、真の素晴らしい結婚であると評価し、理想的な結婚の模範とした。そしてキリストとその両親の関係も、全ての子供達にとっての模範であることを示した³¹。

ジェルソンは、ヨセフのような、「純潔な夫であり優しい父」という存在の必要性を強調した。ジェルソンが自身の愛溢れる人生の中において探求し畏れた霊的な温もりを、ヨセフは与えたのかもしれない³²。

ジェルソンは、「15世紀はジェルソンの時代である」と評価されるほど数々の説教を行い、その活動において名声を得た³³。特に1400年以降、フランス語の説教において彼の名声は徐々に大きいものとなった。彼はより広い範囲の聴衆に語るためにラテン語とフランス語の両方で説教を行ったが、民衆向けの説教においては彼らの理解できるフランス語で説教をした³⁴。現代まで約63本の彼のフランス語説教が残されており、そのうち17本の説教が道徳をテーマに、1402年12月3日から1403年3月18日にかけてなされたものである³⁵。彼は、民衆の道徳的な問題に強く関心を抱いており、常に民衆の最新の問題について自身の意見を述べる準備が整っていた。そのため、「道徳神学 (moral theology)」の専門家と呼ばれるにふさわしい中世の知識人として認識されている³⁶。彼は新たな道徳的事例を解決しようとするとき、一般的なルールや法的な原則をあてにせず、慣習を深く理解しながらも自身の経験と判断を第一に信じそれを適応することで対処した³⁷。

彼がこのような道徳的神学の観点から民衆にフランス語で説教を行った時期は、1389年から1413年までである³⁸。彼の説教の隆盛期と言える1401年から1404年は、幾つかのパリの教会で説教し³⁹、それ以後は

富永 敦子

フランス語で説教を残すことは少なくなった⁴⁰。彼が主に説教を行った教会は、サン・ジャン・アン・グレーヴ（Saint-Jean-en-Grève）である。彼は1403年11月18日にこの教会の主任司祭になり、また、同年翌月の12月24日には、ノートルダム（Notre-Dame）大聖堂の司教座聖堂参事会員となり、ようやく聖職禄を得ることができた。それまでは聖職禄なしで説教を行っていた⁴¹。

1402年12月3日から連続して繰り返された、七大罪をテーマに悔い改めへ導く“Poenitemini”という説教は、ほぼ全てのものがサン・ジャン・アン・グレーヴでなされている。これは、彼がこの時期から、この教会の司祭となるという期待を教皇ベネディクト13世から得ていたからだと考えられる⁴²。

彼の17本の道徳的説教のうち、13本が先ほど述べた Poenitemini シリーズの説教である⁴³。“Poenitemini”とはラテン語で「悔い改めよ」という意味であり、これは、新約聖書の「マルコによる福音書」1章15節の「悔い改めて福音を信じよ（Poenitemini et credite evangelio）⁴⁴。」という御言葉に由来している。先述したように、“Poenitemini”説教は、七大罪の一つを各説教でテーマとして取り上げ、その罪を指摘し悔い改めへと導く形式をとる。1402年の待降節から翌年1403年の四旬節にかけて行われたこの13本の説教のうち、5本が、淫乱について攻撃するものであることから⁴⁵、彼が七大罪の中でも特に性的な罪を心に留めていたことがわかる。

13本の説教のテーマを見てみると、淫乱（luxure）5本、傲慢（orgueil）3本、暴食（gourmandise）1本、強欲（avarice）1本、怠惰（paresse）1本、憤怒（colère）1本、嫉妬（envie）1本である⁴⁶。

彼は、各々の罪について、それが「許される罪（venial sin）」なのか、もしくは「死罪（mortal sin）」に値するののかについて着目している。これを明確に区別することを説教師と悔悟者に求めている⁴⁷。罪か否か、また、その罪の重さは、その行為の目的と意図によって決まるという⁴⁸。

死罪とは、いわゆる「死刑」のことではない。その罪は、人を神から決定的に引き離してしまうため⁴⁹、告解しなければ神との関係が回復されることはない。死罪は、神からの恵みを奪い、永遠の断罪へと導くのである。一方、許される罪は、告解の必要はない。この類の罪を犯した人は、神の怒りを招き神の心を痛めることはあっても、神との関係が絶たれることはないのである⁵⁰。悔い改めの秘蹟を行うことは、司祭の最も重要な行いであり、ジェルソンも他の司祭と同様に、死罪にあたる罪を犯した人には、1年に1度、復活祭前の四旬節の期間に告解するよう積極的に促したが、彼はより頻繁に告解するべきだとし、1年に4度告解することを強く勧めるようになった⁵¹。このことから、彼が告解と悔い改めを、他の司祭や神学者よりも一層重要視して強調していたことが明らかであるし、また、これから分析していく説教においても、彼が常に民衆に親しみのある罪の例を挙げながら、悔い改めの秘蹟について述べているという点が顕著である。

神は説教師に、ある3つの行いによって人々を神のもとに導くことを望んでいるのだ、とジェルソンは信じていた。それは、魂を、浄化すること (purifying)、教化すること (illuminating)、そして完全にすること (perfecting) であった。彼は、真の説教師は賞賛を求めず、唇からだけでなく心から語りかけるべきだ、という信念をもって語り続けた⁵²。

ジェルソンは、民衆が何を求め、何を必要としているかを理解し、それらに合わせて説教を語った⁵³。彼は説教の中でも、副主題とイントロダクションの構成に、特に注意を払っていた。それは、聴衆の関心を引くために、興味を誘う導入で始めるという意味を常に持っていたからである。それはしばしば長めのイントロダクションのこともあったが、主題へ導くための道筋として、民衆の集中を彼の説教に向けさせる良い役割を担った⁵⁴。

Poenitemini シリーズにおいて、ジェルソンが自身の軸として必ず行っていたことは、その日の福音書を注解すること、また、大罪を攻撃する

富永 敦子

ことであった。その日テーマとして掲げた罪を攻撃することにより、道徳的な良心を目覚めさせようとする目的の中で、彼は聴衆がどんな状況の中にあっても彼らが自身の生活を改めることが出来ること、そしてそれを悔い改める方法を示した。彼の説教は、聖書、特に新約聖書からの引用が多く、それはキリストの生涯と愛についてのものだった。彼は聴衆に美德について教え、それを実際の生活の場で実践する意思を常に持つよう促した。彼が好んだ手法の一つは例話を用いることであり、彼は例話の物語の中で、民衆が正しい道を歩むよう説得した⁵⁵。彼は伝えたいことを明確にするため、また、民衆の記憶に留まるようにするために、自身で書いた絵を見せながら語るなど、視覚的な工夫も行った⁵⁶。幾つかの彼の説教は、演劇的と言って良いほど非常に動きのあるものだった⁵⁷。ジェルソンはこのように、民衆に分かりやすく福音を伝えようと様々な方法を用いたが、彼は、聞いた福音や美德によって、彼らの心が真の愛へと揺さぶられ、彼らが常に善を求めそれを成し遂げられるよう願ったのである⁵⁸。

また、ジェルソンの特徴として特に注目すべきことは、彼が小さき子供へ強く関心を抱き、彼らの教育に力を注いだことである。子供は、道徳を教えられるべきであり、神の聖なる息子・娘になるための子供の訓練は、単に子孫を繁栄させることより大切であるとジェルソンは考えた。彼は、教会と社会の改革は子供の道徳的教育から始まるに違いないと信じていた⁵⁹。ジェルソンは、この改革のための第一の責任を彼らの両親に置いた。教会の改革は、子供たちの両親によって成し遂げられ、説教が子供の教育についての具体的な助言をかなり提供していると、彼はこのような面においても説教の重要性を伝えたのである。子供のしつけを特にテーマにしたような説教は彼の説教にはないが、七大罪についての説教の多くにおいて、両親は子供を墮落させないようにすべきであり、子供が行動や考えにおいても罪に耽ることがないように導くべきだと、彼は述べている⁶⁰。両親は、子供が完全に聖い環境の中で育てられるこ

とに注意を払う必要があり、子供を卑しい誘惑へと刺激するような言葉や行動を避けなければならないと、両親に教えた。このように、ジェルソンは、両親が子供の前で性的な関係をもったりそのような話題を決して出してはならないと主張した⁶¹。彼が子供の教育の重要性を説いた理由は、原罪の結果は、小さい子供の中において明らかにされるからである⁶²。若き頃に良い習慣を身につけることは、死罪にあたる冒涇の罪を容易に避けること、また、性的な不品行から自分たちを守ることが出来ると彼は確信していた⁶³。

ジェルソンは、このように子供に関心を注ぐことで、社会が道徳的に、また霊的に墮落しないような道を敷いたが、同時に、病人や貧しい者にも特別に関心を払うなど、社会的な弱者に愛を注ぐことに熱意を注ぎ続けた。彼は、身分や性、階級に関わらず、全ての人に福音が届けられるべきであることを強調し、魂の救いにおいて説教が極めて重要であると考えた。この使命は、キリストから与えられたものであるのだという意識を、彼は絶えず持ち続け⁶⁴、全ての人々を真の光へと導き、彼らが罪から解放され、彼らの生涯が完全なる道によって守られることを願って、神の御言葉を語り続けた。このような万人の救いに対する熱い思いが、彼の説教への情熱を駆り立てたのだ⁶⁵。このような特徴に着目しながら、次節では、ジェルソンが行った説教を幾つか具体的に提起して分析していく。

第3章 ジェルソンの説教における「ルカによる福音書」の役割

ジェルソンに関する研究は、18世紀から盛んになった。18世紀の最後の何十年間は、多くのジェルソン主義者（gersonisants）が、著書を出版した。特にデュ・パン（Du Pin）は、ジェルソンの著作や説教のほぼ

富永 敦子

全てを編纂し、研究の進展に大きく貢献した⁶⁶。

本論文執筆にあたって中心的に参照した『ジェルソン全集 (*Œuvres complètes [de] Jean Gerson*)』の著者パレモン・グロリユー (Palémon Glorieux) は、デュ・パンを始めとする、前の時代の研究者が集めた著作や説教を編纂し、1960年代にこの全集を全7巻に渡って出版した。第7巻(2)には、フランス語の説教が63本収録されている。しかし、これは完全なものではなく、45本もの説教が写本のまま保存されている⁶⁷。彼の説教を全て調べるには、デュ・パンの写本に戻る必要があるが⁶⁸、筆者が分析したいテーマの説教は、グロリユーの全集に全て入っていたので、今回の論文では写本に残されている説教については触れない。

本論文で分析するジェルソンの説教を選択するにあたって、次のような点を基準とした。

第一に、ジェルソンの行ったラテン語とフランス語の説教のうち、フランス語で行った説教のみを分析対象とした。なぜなら、本論文では、民衆向けの説教においてジェルソンがどのような形式と内容で彼らの信仰を励ましたのかについて考察することを目的としており、フランス語で現存している63本の説教は全て、彼ら、つまり一般民衆を対象としているからである⁶⁹。

第二に、先述したように彼は、道徳神学という立場から多くの説教をし、1402年から1403年にかけては13本もの七大罪に関する民衆説教を“*Poenitemini*”というシリーズで連日行った。それゆえ、この七大罪をテーマにした説教を分析することで彼の道徳神学をより理解出来ると考え、*Poenitemini* シリーズの中から幾つか取り上げることにした。

第三に、説教を読む中で、彼が「ルカによる福音書」を引用する頻度が多い点に気付き、彼がなぜルカ福音書を好んだのか、彼の持つ思想と何か関係があるのではないかと興味を持ち、*Poenitemini* シリーズの中でも特にルカ福音書の引用頻度が高い説教を選んだ。

ジェルソンとルカ福音書の関わりを知るにあたり、ここでは次にルカ

福音書の特徴を示す。

ルカは、キリストにおける神の行為を、人間の事柄の中での神の偉大な介入と見ている。それによって救いがもたらされるのである。彼は、神の救いは、全人類に対する神の大なる愛から生じており、神の愛が様々な人々にどのように示されているかを喜んで明らかにしている。神は、偉大な贖いの目的を成し遂げるのと同時に、個々の人々にも関心があるのだとルカは見る。人々に対する神の関心は特に、社会的に高く評価されていなかったグループ、すなわち、女性、子供、貧しい者、評判のよくない者に向けて表されていると彼は考えた。マタイの福音書でたとえ話が神の国に集中しているのに対し、ルカが記しているたとえ話は、人を強調する傾向があることから、彼がいかに個々人に関心があったのかが伺える。「小さな人々でも神にとっては重要である」という考えがルカは強かったのである⁷⁰。

第四に、Poenitemini シリーズではないが、ルカ福音書を主題としたり、この福音書を特に多く用いている説教も、ジェルソンの思想と説教展開を知る上で分析するに値すると判断し、いくつか取り上げることにした。

これらを基準として、本論では4本の民衆向け説教に絞り、分析していく。彼の思想とルカ福音書の特徴とに共通する点があるのか、また、彼の説教で発揮されているルカ福音書の役割とはどのようなものなのか、これらについて明らかにしたいと思い、今回分析するに至った。

【説教1】1402年12月17日にサン・ジャン・アン・グレーヴで行われた、淫乱 (luxure) の罪を攻撃した説教。

ほぼ全ての民衆説教において、ジェルソンはある定型文を持ち出して語るのだが、この説教でもまず、以下のような特徴的な定型文をもって主題に入っていく。

「自分の考えに閉じこもらず自身の目を神へ向け、栄光ある真実な信仰の光を見るように (En eleuant les yeux de ma pensee et en regardant

富永 敦子

par la lumiere de vray foy le glorieux)⁷¹。]

ジェルソンは、このように呼びかけることにより、聴衆が日常の思い煩いによって心を塞ぐことなく、心を神に集中させることが出来るように導いた。

この説教は、ルカ福音書7章18-27節を主題に掲げ、展開されていく。彼はこの説教の冒頭で、キリストが人性を持ってこの世に誕生したことを述べ、その栄光ある誕生、そして受難、復活によって多くの奇跡が成し遂げられたことを宣言した。奇跡の例として、耳の不自由な者が聞こえるようになり、無学のものが賢者となったことを示す。しかし、この奇跡とは、もはや肉体的なことにとどまらず、悔い改めにより魂が新たにされたことを指している⁷²。

また、ジェルソンは主題に入る前に、「美德の道によって罪と関わりを持つことのない道を歩めるよう、人々を福音が示す分別と貞潔に引きずり込みたい。」と力強く宣言すると同時に、この地から罪を取り除くことに力を注いだバプテスマの聖ヨハネの執り成しを、決して拒ばまないよう聴衆を諭した⁷³。

この説教の主題には、聖ヨハネと彼の弟子、そしてイエスと群衆が登場する。聖ヨハネの弟子2人がイエスのもとに行き、「来るべき方は、あなたでしょうか。それともほかの方を待たなければなりませんか。」と尋ねる。その時イエスは、病気や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの群衆を癒し、大勢の盲人を見えるようにしていた。そこにやってきた聖ヨハネの弟子に、「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」と答える⁷⁴。

ジェルソンがこの箇所を用いたのは、キリストを信じれば、弱くて小さき病人や貧者も奇跡を体験することが出来る、という彼自身の万人に

対する救いの思いを示すためだと言える。また、彼は、この説教の中で、「キリストが神でありながら人でもある (On doit conclure qu'il fut Dieu et homme)。」という点を繰り返し強調している⁷⁵。このことは、「神の国だけでなく人を強調する傾向がある⁷⁶」というルカ福音書の特徴に基づいている。このようにキリストの人性を強調することは、キリストを各々の主と認めるよう促しつつ、キリストを「人」と教えることでキリストとの親近感を感じさせる。これは、ジェルソンの特徴である神秘思想に通じる説教展開だと言える。彼は、神の認識は知識ではなく信仰であると考え⁷⁷、「より完全な確実性をもつとされる経験」によって、神を知ることができる信じていた⁷⁸。人性をもってこの世にやって来、「人」という同じ目線で彼らの内面に直接語りかけてくれるキリストに、ジェルソンは着目しているのである。

また、ジェルソンは聖ヨハネに対する畏敬の念を抱いていたことが垣間見える。聖ヨハネは、罪の赦しを得るための悔い改めのバプテスマを授け、悔い改めを強く説いたことで知られている。このような聖ヨハネの人物像が、ジェルソンが聖ヨハネを模範とした理由だと言える。彼はこの説教の中で、聖ヨハネの特徴として、根気強い (constance)、禁欲的 (abstinence)、知恵深い (sapience) という3つを示している⁷⁹。ジェルソンは、ヨハネのこれらの特徴に倣うよう聴衆に呼びかけ、「あなたたちが学んだ道徳的な価値観に戻りなさい。不潔で好色な淫乱の罪は人間的な創造物であり、多くの人がある罪を自分の内に住まわせてしまう。」と民衆に注意を促した⁸⁰。彼は、淫乱について、「淫乱は盲目と同じであり、魂の目を見えなくさせ、また、上手く歩けないようにさせる。良い教え、正しい知恵を妨げ、サタンの住まいを作ってしまう。さらに、魂だけでなく、同時に体も病気に陥ることになり、美德の道から自身を引き離してしまう。」と、淫乱の罪は、人を墮落に向かわせ、神の恵みを妨げてしまう、ということを示したのだ⁸¹。このような罪を自身の内に住まわせてしまうと、「福音書に示されている全ての不幸と病気を、内面的にも

富永 敦子

外面的にも被ってしまう。」とジェルソンは忠告している⁸²。

聖ヨハネを模範とし、悔い改めをもって真実なキリストに目を上げるよう促したこの説教は、目、耳、口など、体の部分を扱った箇所を引用し、人々の霊的な病気状態を指摘しながら、身体的な弱者に関心を寄せている。これは、「神が個々の人々に関心があり、神の目的は弱き人々の生活の中で作用している⁸³」という立場をとるルカ福音書の特徴に重なる。

【説教2】1402年12月10日、同じくサン・ジャン・アン・グレーヴで行われた、淫乱をテーマにした他の説教。

この説教もまた、ルカ福音書の引用が多くみられ、さらに淫乱の罪がどのような結果を招くのかということについて、ジェルソンの考えを多く提示している。

彼は、「淫乱の罪は、他のどんな罪よりも大きく、たとえその罪を告解したとしても大きな痛みを伴うものだ。」と考える⁸⁴。淫乱の罪は、その人の心を全て覆ってしまい、自分自身の良心を忘れてしまう。盲人のごとく何も見えなくなってしまい、神のこと、またその裁きについて忘れてしまうのである⁸⁵。

この説教の主題は、ルカ福音書21章25-33節であり、「天地は滅びるが私の言葉は決して滅びない (le ciel et la terre transseront, ou fineront, certes mes paroles ne fauront ja.)。」という御言葉で締めくくられる。また、ルカ21章34節「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意なさい。さもないと、その日が不意に罌のようにあなたがたを襲うことになる。」を引用し⁸⁶、生活の中で神を忘れ去ることがないように繰り返し忠告している。彼は、淫乱は「酔っ払い (soullarde)」だと表現している。酔っ払いは、「暴食 (gloutonnie)」という七大罪の一つであり、淫乱と暴食の罪を関連づけて説教を展開している。これらは、生活から完全に排除すべき、神が最も忌み嫌う罪であると教えている⁸⁷。ジェルソンは、聴衆が常に神に祈り、淫乱の罪から神に立ち帰るよう導いている⁸⁸。「神は、全ての人の心を照らしたいと思っ

ており、裁きを受けることがないように悔い改めることを強く促したいと思っている方である。」と、ジェルソンはこの説教を締めくくっている⁸⁹。彼が、どれほど罪を忌み嫌ったのかということ、また、たとえ罪を犯したとしても、悔い改めの姿勢をもって神に立ち帰ることが重要だと考えていたことが、この説教からよくわかる。全ての人の心を真の光で照らしたい、というジェルソンの普遍的な愛と救いの思いが読み取れる。ここでもまた、「万人の救い」という面でルカ福音書の特徴が表れているのに加え、「人々には悔い改める責任があり、彼らはやがて裁かれることになる。裁きは、この福音書においてしばしば主題となる⁹⁰。」というこの福音書の特徴とも、ジェルソンの説教内容が重なると言える。

【説教3】1402年2月26日、サン・ジャン・アン・グレーヴでなされた、四旬節を機に自身の内から悪霊を追い払い、罪から解放される幸いについて解き明かした説教。

この日は、四旬節の3週目の主日にあたる。四旬節は、回心の季節であり、「告解」を行う時期である。この説教は Poenitemini シリーズではないが、七大罪を提示しながら悔い改めを説いており、ルカ福音書の引用も多く見られる。

この説教は、ルカ11章28節「むしろ幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である (Pour ce que benoitz sont cilz oyent la parole de Dieu et la gardent)。」を主題に掲げて展開される。「神が、私たちの内にいる悪霊を追い出して下さるよう切に祈ろう。そうすると、話せなかった者が話せ、聞こえなかった者がよく聞こえ、見えなかった者がよく見えるようになる。」と、悪霊の頭ベルセブル (Beelzebuth) を持ち出しながら、悪霊を追い出すことで身体的にも霊的にも健全な状態に回復し美德を得るように、論している。また、ルカ福音書17章21節「神の国はあなたがたの間にあるのだ (regum Dei intra vos est)。」を引用し、神の国は、罪や背信によって壊されるが、恵みによって再建・修復されるのだとジェルソンは語っている⁹¹。このように、悪霊は、神の恵みによっ

富永 敦子

て本来私たちの内にあった神の国を力ないものにしてしまうことを教えている。目、耳、口などの身体的な病気と関連づけながら、罪による霊的な病気状態を指摘する説教展開は、彼の説教に多く見られる。このような弱き者への関心は、「神の目的は、小さな人々の生活の中で作用している。小さな人々でも、神にとっては重要であるから⁹²」というルカ福音書の特徴をジェルソンは大いに表していると言える。罪の中にいる者、また、弱った者の中でこそ神の愛が示される、ということに彼は確信を抱いていたのだ。

【説教4】1403年6月24日、聖ヨハネの祝日に行われた説教。場所は不明。

この説教は、聖霊で満たされた聖ヨハネの誕生を祝福する内容で語られた後、真実な信仰の光、つまりキリストの誕生の喜びに与る尊さについて説き明かされている。主題は、ルカ福音書1章14節「多くの人もその誕生を喜ぶ (*Multi in nativitate ejus gaudebunt*)。』で、ジェルソンはこの主題を冒頭でラテン語で語った後に、フランス語でも繰り返した (“*maintes gens s’esjoiront en sa nativite*”) ⁹³。ジェルソンは聖ヨハネの誕生の喜びに与るように聴衆を招いている。来たるべきイエスの道を備え、聖霊で満たされた聖ヨハネに注目するよう、また聖ヨハネの両親ザカリアとエリザベトが神に従い仕える敬虔な姿を、見習うように教えている⁹⁴。不平不満を言わず神の掟と教えを守り成し遂げることの気高さを、御言葉を通して説いている⁹⁵。そして、聖ヨハネに続いてやって来た真の光である、私たちの主イエス・キリストを褒め称えるよう導き、「だから今、霊的で清い喜びを見て、私たちも共に喜びましょう。」と述べた⁹⁶。その後、ジェルソンは、「神へ向かって回心し、真の悔い改めによって許しを請い、あらゆる不安を捨て去ろう。」と呼びかけ⁹⁷、他の説教と同様、悔い改めへと促している。彼はこの説教でもまた、「心の目を開き、その目から全ての汚れを取り除こう。」と決まり文句で語りかけた後、「そして真実な信仰の光を見よう。そうすれば私たちは、完全なる喜びで溢

れているキリストの誕生に与るであろう。しかし、私たちの目は、罪によって閉ざされている。」と述べ⁹⁸、悔い改めの祈りによって神に助けを求めよう民衆に願い、彼らが真実な光の道から逸れないよう導いた。

この説教のまとめの部分では、「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存知である。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。」と、ルカ福音書16章5節を引用しながら⁹⁹、人ではなく神を見上げ、神の喜ばれることを行うように、ジェルソンは聴衆に論している。また、同じ箇所でも再び主題を述べるのだが、ここでは特に苦難の中にいる病気の子供たちに思いを馳せながら¹⁰⁰、「多くの人もその誕生を喜ぶ (*Plusieurs s'esjoissent, etc.*)。』の主題を繰り返している¹⁰¹。そして、締めくくりの御言葉としてルカ福音書1章15節「彼は主の前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいる時から聖霊に満たされていて (*Vinum et siceram, etc.*)」を引用した。ここでもまた、子供に焦点を当てながら、酒を飲まず聖霊で満たされている子供は「子供の暴食や酔っ払いに敵対している (*contre la gloutonnerie et yvresse des enfants*)。』と、人間的な楽しみに耽ることなくただ聖霊で満たされることの幸せを説いている¹⁰²。子供にこのような真の幸せを味わわせるためには、やはり両親の姿が大きく関わる。「結婚している者は決して子供を追い散らしてはならない。両親の確固とした信仰が子供に影響を与える。」のだとジェルソンは考えたのだ¹⁰³。

最後に分析したこの説教は、社会的に弱く小さき者の中でも、特に子供に関心が寄せられている点で、ジェルソンの思想とルカ福音書の特徴が見事に合致して展開されていると理解できる。

今回分析したこれら4本の説教に、ジェルソンの道徳神学の特徴が十分に表れ尽くされていると言えるだろう。全ての説教に共通して言える特徴は、万人に対する救いへの強い思いである。ジェルソンは特に、病人や子供という社会的に小さき存在に関心と愛を注いで、神の祝福の下へ導こうと心を傾けた。全ての人の心の目を開くことを使命としてジェ

富永 敦子

ルソンは語りかけ、罪を大胆に指摘し、永遠の光となる真実な道を、御言葉を通して絶えず示し続けたのである。

おわりに

本論文では主に、ジェルソンの道徳神学、及び神秘神学の特徴を理解することから着手し、彼の思想とルカ福音書の特徴がどのような面で共通しているのかを探った。ジェルソンは社会的に小さき者の中でも、子供という存在に特に目を留め、聖書を通した道徳的な子供教育に熱意を注ぎ続けた。

一方ルカも、子供に対して強い関心を抱いていた。ルカは、神の計画が、聖ヨハネとイエスの誕生と初期の生活の中で成就されつつあったことを強調している。彼は、神の計画を、子供に関わる出来事の中に見出しているのである。また、ルカ福音書は、キリストの少年時代についての物語を提供している唯一の福音書である¹⁰⁴。もちろん、子供への関心がこの物語を書いた唯一の理由ではないが、子供に対するルカの関心の深さを示す最も顕著な例は、幼児期物語にあると言える¹⁰⁵。

ジェルソンの説教を分析すること、また、ルカ福音書の特徴を知ることを通して、彼がルカ福音書の御言葉を頻繁に用いて語った理由・意図を解明することが出来た。彼はルカ福音書を通して、自身の道徳的神学の思想や自身の民衆教化の方法を大胆に表し、民衆の心が真なる神へ向かうよう祈り、語り続けたのである。現存している説教の数の多さ、また、「彼はパリにおいて、最も優れた説教師の一人としてみなされていた¹⁰⁶」という評価から、ジェルソンが、15世紀のパリにおける民衆教化において、素晴らしい導き手となっていたことが理解できる。

-
- ¹ D.L d'Avray, *The Preaching of the Friars, -Sermons diffused from Paris before 1300-*, Oxford, 1985
- ² *Ibid.*, p.4.
- ³ アロン・Ya. グレーヴィチ著(中沢敦夫訳)『同時代人の見た中世ヨーロッパ—十三世紀の例話 (*Kul'tura i obshchestvo srednevekovoi Evropy glazami sovremennikov Exempla XIII veka*)』平凡社、1995年、p7。
- ⁴ グレーヴィチ、同上、pp.255-256。
- ⁵ 大黒俊二『嘘と貪欲 西欧中世の商業・商人観』名古屋大学出版会、2006年
 赤江雄一「語的一致と葛藤する説教理論家—中世後期の説教における聖書の引用—」(小澤実『知のマイクロコスモス』中央公論新社、2014年
 赤江雄一「ラテン語で説教を書き、俗語で説教を行う説教者の心性—範例説教集と説教術書の分析から—」(研究会「説教史料論の最前線」九州大学文学部共同演習室、2006年3月4日
- ⁶ Daniel Hobbins, *Authorship and publicity before print : Jean Gerson and the transformation of late medieval learning (The Middle Ages series)*, University of Pennsylvania Press, 2013
- ⁷ Robert Sweetman, *Preaching* (William W.Kibler et al., *Medieval France An Encyclopedia*, Routledge, 1995), p.756.
- ⁸ Dominique Poirel, *Sermon* (Claude Gauvard et al., *Dictionnaire du Moyen Age*, PUF., 2002), p.1329.
- ⁹ *Ibid.*, p.756.
- ¹⁰ *Ibid.*, p.756.
- ¹¹ E. ダーガン(中嶋正昭訳)『世界説教史〈2〉』教文館、1995年 (Edwin Charles Dargan, *A history of preaching*, New York Hodder&Stoughton, 1995)、pp.28-30。
- ¹² 同上、p.28。
- ¹³ ジェフエリー・バラクラフ(別宮貞徳訳)『図説 キリスト教文化史Ⅱ』原書房、1993年 (Geoffrey Barraclough, *THE CHRISTIAN WORLD-A SOCIAL AND CULTURAL HISTORY OF CHRISTIANITY*, Thames and Hudson Ltd, 1981)、p.103。
- ¹⁴ ジャン・ジェルソン「神秘神学 (*De mystica theologia*)」(上智大学中世思想研究所『中世思想原典集成—中世末期の神秘思想—』平凡社、1992年) p.404。
- ¹⁵ ナヴァール学寮 (Collège de Navarre) : パリ大学では12世紀から初期の学寮(1180年)が始まったが、その数は13世紀に増加し、規約も明確にされた。ナヴァール学寮は1304年に創設され、当時は唯名論の拠点となっていた。

富永 敦子

- ¹⁶ ピエール・ダイイ Pierre d'Ailly (1350-1420) : フランスのオッカム主義者。教会政治家、神学者、枢機卿。学識を認められ、ナヴァール学寮長 (1384)、パリ大学学長 (1389-95) を歴任。
- ¹⁷ 森田良紀「ジャン・ジェルソン」(上智大学中世思想研究所『中世の教育思想(下)』東洋館、1985年)、p.370。
- ¹⁸ D. Catherine Brown, *Pastor and Laity in the Theology of Jean Gerson*, Cambridge University Press, March 27, 1987, p.240.
- ¹⁹ 森田、前掲書、pp.371-372。
- ²⁰ 同上、p.372。
- ²¹ Brown, *op.cit.*, p.10.
- ²² Louis Mourin, *Jean Gerson prédicateur français*, De Tempel, 1952, p.145.
- ²³ ジェルソン、前掲書、pp.407-409。
- ²⁴ 同上、p.405。
- ²⁵ 同上、p.456。
- ²⁶ 森田、前掲書、p.362。
- ²⁷ 宮澤康人「キリスト教における〈神イメージ〉の両性具有と父子関係」『バロック時代のイコノグラムを中心に放送大学研究年報第21号』2003年、p.41。
- ²⁸ 同上、p.42。
- ²⁹ 同上、p.42。
- ³⁰ Paul Payan, *JOSEPH—une image de la paternité dans l'occident médiéval—*, les ateliers de Normandie Roto Impression, en fevrier 2006, p.175-177.
- ³¹ *Ibid.*, pp.179-180.
- ³² Brian Patrick McGuire, *Jean Gerson and the Last Medieval Reformation*, Penn State University, 2005, p.197.
- ³³ Hobbins, *op.cit.*, p.183.
- ³⁴ *Ibid.*, p.160.
- ³⁵ Brown, *op.cit.*, pp.17-18.
- ³⁶ Hobbins, *op.cit.*, p.147.
- ³⁷ *Ibid.*, pp.52-53.
- ³⁸ *Ibid.*, p.54.
- ³⁹ *Ibid.*, p.55.
- ⁴⁰ *Ibid.*, p.160.
- ⁴¹ McGuire, *op.cit.*, pp.163-164.
- ⁴² Mourin, *op.cit.*, p.140.
- ⁴³ *Ibid.*, p.139.
- ⁴⁴ Et dicens: Quoniam impletum est tempus, et appropinquavit regnum Dei:

poenitemini, et credite Evangelio.

ヴルガータ聖書、マルコ 1:15 (Evangelium secundum Marcum 1:15)

⁴⁵ Mourin, *op.cit.*, p.139.

⁴⁶ Palémon Glorieux, *Œuvres complètes [de] Jean Gerson: L'œuvre française, sermons et discours (340-398)*, Desclée, 1966, p.xii-xiii.

⁴⁷ Brown, *op.cit.*, p.64.

⁴⁸ McGuire, *op.cit.*, p.142.

⁴⁹ Brown, *op.cit.*, p.65.

⁵⁰ *Ibid.*, p.64.

⁵¹ *Ibid.*, p.57.

⁵² *Ibid.*, pp.19-20.

⁵³ Hobbins, *op.cit.*, p.185.

⁵⁴ Brown, *op.cit.*, p.25.

⁵⁵ *Ibid.*, pp.28-29.

⁵⁶ Hobbins, *op.cit.*, p.163.

⁵⁷ Brown, *op.cit.*, p.23.

⁵⁸ *Ibid.*, p.18.

⁵⁹ *Ibid.*, p.238.

⁶⁰ *Ibid.*, pp.239-240.

⁶¹ *Ibid.*, p.241.

⁶² *Ibid.*, p.239.

⁶³ *Ibid.*, p.240.

⁶⁴ *Ibid.*, pp.48-49.

⁶⁵ *Ibid.*, p.51.

⁶⁶ Glorieux, *op.cit.*, pp.9-10.

⁶⁷ *Ibid.*, p.vii.

⁶⁸ Pascoe, *op.cit.*, p.3.

⁶⁹ Glorieux, *op.cit.*, p.17.

⁷⁰ レオン・モリス著(岡本照世訳)『ルカの福音書』いのちの言葉社、2014年(Leon Morris, *The Gospel according to Luke*, Inter-Varsity Press, Nottingham, United Kingdom, 2014)、pp.43-45, pp.50-51。

⁷¹ Glorieux, *op.cit.*, p.822.

以下、原文の引用は、字数制限の関係上ほとんどを割愛せざるを得なかった。

⁷² Glorieux, *op.cit.*, p.822.

⁷³ *Ibid.*, p.822.

⁷⁴ *Ibid.*, p.823.

富永 敦子

- ⁷⁵ *Ibid.*, p.823.
- ⁷⁶ モリス、前掲書、p.51。
- ⁷⁷ ジェルソン、前掲書、p.408。
- ⁷⁸ 森田、前掲書、p.363。
- ⁷⁹ Glorieux, *op.cit.*, p.823.
- ⁸⁰ *Ibid.*, p.823.
- ⁸¹ *Ibid.*, p.824.
- ⁸² *Ibid.*, p.824.
- ⁸³ モリス、前掲書、p.51。
- ⁸⁴ Glorieux, *op.cit.*, p.821.
- ⁸⁵ *Ibid.*, p.812.
- ⁸⁶ *Ibid.*, pp.812-813.
- ⁸⁷ *Ibid.*, p.811.
- ⁸⁸ *Ibid.*, p.813.
- ⁸⁹ *Ibid.*, p.821.
- ⁹⁰ モリス、前掲書、p.60。
- ⁹¹ Glorieux, *op.cit.*, p.753.
- ⁹² モリス、前掲書、p.51。
- ⁹³ Glorieux, *op.cit.*, p.717.
- ⁹⁴ les parens saint Jehan furent nobles et dignes selond le monde, et dedies et sacrés a Dieu, de la lignee sacerdotale.
- ⁹⁵ ルカ福音書1章8節「さてザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき (Factum est cum sacerdotio, etc.)」
- ⁹⁶ Glorieux, *op.cit.*, p.718.
- ⁹⁷ *Ibid.*, p.718.
- ⁹⁸ *Ibid.*, p.719.
- ⁹⁹ *Ibid.*, p.720.
- ¹⁰⁰ 「苦難の中にいる病気の子供たちが抱く喜びを思い起こさない (Notez de diverses joys[...des mauvais enfans qui font douleur)。」
- ¹⁰¹ Glorieux, *op.cit.*, p.720.
- ¹⁰² *Ibid.*, p.720.
- ¹⁰³ *Ibid.*, p.719.
- ¹⁰⁴ ルカ福音書2章39-52節。
- ¹⁰⁵ モリス、前掲書、p.52。
- ¹⁰⁶ Brown, *op.cit.*, p.23.